ガンダーラ仏拝観——この見事な融合文化

"Gandhara Art and Bamiyan Site"—a Timely Exhibition of Harmonized Combination of Cultures

村松　眞一
MURAMATSU Shin-ichi

Abstract: The "Gandhara Art and Bamiyan Site" Exhibition was held at the Shizuoka Prefectural Museum of Art for the early three months of this year. It was indeed a marvellous exhibition in that it showed a finest example of harmony and combination of cultures, as well as a rich collection in Japan of Gandhara sculptural works. The Exhibition was divided into nine parts: Chap. 1. Statues of Buddha, Chap. 2. Bodhisattvas, Chap. 3. Preaching Buddha, Chap. 4. Biographical reliefs of Buddha, Chap. 5. Indian and Greek Gods, Chap. 6. Stuccos, Chap. 7. Displaced cultural property in Afghanistan, Chap. 8. Bamiyan site, and Chap. 9. Buddhist art in Xinjiang, China. For most visitors, especially admirable were probably Chapters 1~6. A typical statue of Buddha is nearly life-sized with a mustached, clear-cut face in Greek style; one representative piece of Bodhisattva with crossed legs realy gives the impression of a princely young man aspiring to enlightenment. Among biographical reliefs of Buddha, those of Temptation and of the First Sermon show a fine touch of realism, and one head of Buddha in stucco may be said a Buddha beautiful in meditation. As a whole, these sculptural works strike us as rather modern, not so archaic, representing Buddhism and Hellenism in finely harmonized combination.

Keywords: The Shizuoka Prefectural Museum of Art, Gandhara art and Bamiyan site, Statues of Buddha, Bodhisattvas, Preaching Buddha, Biographical reliefs, Stucco, Buddhism and Hellenism.

静岡県立美術館、ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡、仏陀立像、菩薩、説法図、仏伝図、ストゥッコ、仏教とヘレニズム、融合、近代性。

静岡県立美術館で、今年三月末までほぼ三か月余り開催されていた「ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展」はまことにすばらしいものであった。

ガンダーラ仏が百点あまり、日本の国内だけで、これだけ多くの作品を一堂に集めて展示できたというのも驚きで、監修者宮治昭氏（県立美術館長）によると、現在わが国は世界で屈指のガンダーラ・コレクションを誇っているという。日本の公的機関のほか、個人や宗教団体や寺院が所蔵し、それもこの二、三十年の間にもたらされたもので、政治的、経済的に困難な状況下の現地パキスタン、アフガニスタンから流出した文化財であるとのこと、ガンダーラ仏は日本人の感性に合い、愛好者が多いからであろう、と言う。

自宅から比較的近いのと、七十歳以上は観覧料無料、車椅子も利用できるのは有難かった。このひどい世の中に、私がこの展示から受ける感銘、感動はまことに得難いものであったと言うほかない。

展覧会の展示は全部で９章にわたっていた（１章仏陀像、２章菩薩、３章仏説法図、４章仏伝図、５章守護神、６章パキスタン、アフガニスタンのストゥッコ、７章アフガニスタンの流出文化財、８章バーミヤン遺跡、９章西域の仏教美術）。初めから６章までが、見どころであるように感じられたが、なかでも第４章の仏伝図、つまり釈尊の誕生から入滅にいたる説話を浮彫彫刻として作ったものが、これだけ集められたというのも、その不詳の作者たちの熱き思い、制作の情熱とともに、驚きであった。

最初に目に入る仏陀像はほぼ等身大の立派な立像（りゅうぞう）。面長な顔の彫りは深く、鼻筋が通り、口髭をはやし、目を見開いて、口元を引き締め、やや威厳のある面貌である。流れるような衣の襞（ひだ）も美しく、全体としてもバランスをよく保ち、この展覧会の第一頁を飾るに相応しい作品であると思った。典型的なガンダーラ仏の優れた一例であろうが、何かこのような人物が現に存在するかのような感じで、生身の我々人間との距離の近さを実感する。制作は２世紀とあったが、とても大昔のものとは思われない。むしろ顔立ちは近代的といってもよい。ギリシャ彫刻の感性と手法が入らなければ、とうていこうした造形は生まれなかったであろう。（図１）

以下六点が仏立像（一点は下半身が欠損）。顔立ちはそれぞれ異なり、立派なもの、ふくよかなもの、静かなもの、やや微笑んで語りかけそうなもの、等々があったが、概して私には、いずれも親しみ易い感じであった。私がギリシャ神話に見る彫像に見慣れているためかもしれない。あるいは西欧のヒューマニズムというものを実感として体験しているからかもしれない。少なくとも、奈良や京都にあるわが国の仏像と比べると、２～３世紀の作と言われるが、むしろ近代的という印象が強かった。

菩薩像、すなわち修行中の釈尊を象ったものでは、数点あるなかで、２～３世紀ごろ片岩に刻んだ高さ60㎝ほどの交脚菩薩像が代表的な作品と思われた。一般に当時の王侯、貴族をモデルにしているとのことだが、立派な口髭を生やし、ギリシャの若者の髪形、首飾り、耳飾りなど装身具を身につけている。上半身裸体で、左肩にショールを巻きつけ、膝

の上に垂らす。肉付きや骨格がよくわかる造形で、ギリシャ彫刻の伝統が生かされているという。悟りを志向する世俗的な王族の若者という印象であった。（図２）

仏説法図として六点ほど展示されているものは、主として両手で胸に説法印を結ぶ仏坐像を中心に据えた浮彫彫刻で、両脇に菩薩立像を従えている「仏三尊像」であった。ここに掲げる作品も、穏やかな顔立ちで威厳はなく、親しみを感じさせる。普通、仏陀は大きな蓮華座に坐り、左右の菩薩像は侍者として小蓮華座に立つ。私は坐っている仏陀に、あらためて座像というものの良さを実感した。もちろん両足を組む座禅の姿勢だが、これが観る者にも仏教特有の安定感を与える。キリストの座像というものはほとんど見たことがなく、こうした安定感はまずキリスト教にはないと言ってよいかもしれない。仏教は安らぎの宗教であり、それも現世における安らぎである。仏教語「安心（あんじん）」という言葉の意味を噛みしめる思いであった。（図３）

仏伝図とは、釈尊の生涯にまつわる説話を絵や浮き彫り彫刻で表したものだが、ガンダーラでは壁画はほとんど残っておらず、大方浮彫彫刻であるとのこと。数多くの作品が発掘され、120 程の仏伝場面が知られており、これほど詳しいのは他では例を見ない、と言われる。仏陀の誕生前後から始まって、通学や武芸競技、樹下思惟、婚約、結婚、出家決意と出城、悟り妨害を試みる天界の魔王マーラの誘惑、仏弟子となる五人を相手の初の説法（「初転法輪」）、発情した像を鎮めたという話等々を経て、涅槃、納棺、舎利の争奪、仏塔礼拝までを紹介してあった。ここに描かれる各人物の表情はなかなか豊かなものもあり、彫刻師たちの、現実の釈尊に傾けた情熱を思わずにはいられなかった。

「マーラの誘惑」として展示してあるものは、誰がみても興味深いであろう。魔王が三人の娘を連れ、色仕掛けで釈尊を誘惑している。品（しな）を作っている様がよくわかる。（図４）また二点ある「初転法輪」のうちの一点は、釈尊の左右に並ぶ弟子たち一人一人の表情が克明に彫られていて、確かに秀作と言われるだけのことはあると思った。（図５）

守護神・装飾を表す作品では、仏教美術のなかに多くのギリシャ・ローマ系のテーマが組み込まれていた。つまり酒神ディオニュソスやその同族シレーノスなどが寺院の壁面に装飾として使われ、ギリシャ神話で天を支えるアトラスが、建物を下から支えるような場所に用いられていた。会場ではその像だけの断片が展示されていたが、一目みるなり、これはギリシャ神話の神であると判った。

「パキスタン・アフガニスタンのストゥッコ」の章にも、すばらしい作品が展示されていた。「ストゥッコ」(Stucco)とは化粧漆喰と訳し、石灰に粘土を混ぜ、つなぎとして藁などを入れた漆喰のこと。脆いので、完全な形で残るものは少なく、ガンダーラ後期に作られた断片的な頭像が多数収集されているそうである。柔軟な素材であるため微妙な表現が可能で、石膏より温かみがあるように感じられた。ここには絵葉書にもなっていた、その逸品ともいうべき仏頭像を掲げる。（図６）面長の顔立ち、瞑想風のまなざしで、鼻筋が通り、口元をキリッと結んでいる。写実的にこれほど美しく整った仏さまの頭像は見た

ことがなかった。否、実際美しすぎるといってもよい。いやが上にも美しく仕上げたという感じで、確かに仏さまであるが、それがギリシャ風の顔貌である。ここにも、私は東西文化の出会いと融合の優れた成果を見る思いがした。と同時にこれを制作した人の情熱と美意識を思った。写実的理想主義と言ったらよいだろうか。そしてこのような作品が出土したのが仏像発祥の地であるということにも感慨を覚えずにはいられない。排他的でない仏教の特質が感じられるからである。

さらに感心した作品をあげれば、「菩薩頭部」と呼ばれる１点である。ここに掲げるその写真を見る人の第一印象はどうであろう？（図７）あのギリシャ彫刻アポロ像かと思う人が多いのではないか。解説によれば、額にかかる巻き毛もギリシャ青年によく見受けられるもので、気品に溢れ、とうてい一供養者の像とは思われない。おそらく主役である仏陀の脇に立つ何らかの神像、あるいはバラモン形の弥勒菩薩であろう、という。

その他、アフガニスタンの流出文化財の章では、「仏弟子頭部」、「ヴァジュラパーニ」（執金剛神）と呼ばれる作品が注意を引いた。前者は、どこにでも見掛けるような親父さんの頭像ではないか。額に皺をよせ、少し口を開けて、困ったような表情がよく出ている。後者は、右手に金剛杵をもっていたというので、この名があるようだが、古代ギリシャの袖の短い上着（チュニカ）をつけている。何という穏やかな少女にも似た守護神であろうか。仏法を護る力士とは思えない。（図８，９）

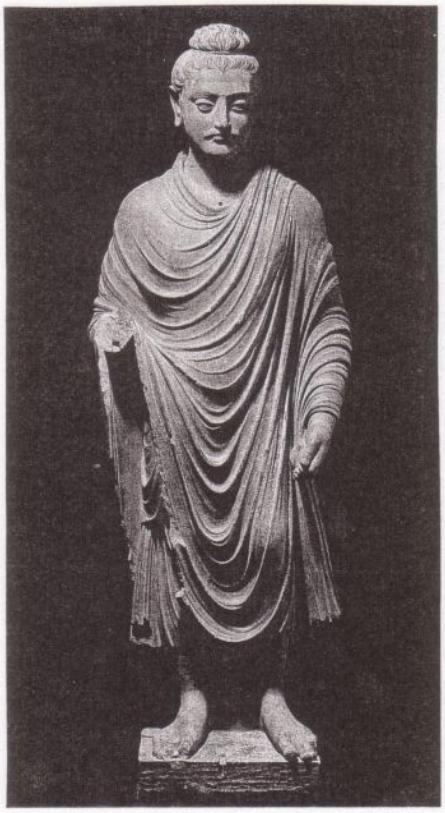
こうして、この展覧会に展示されている作品を辿ってみると、そのすべてに共通して認められたことは、仏陀や菩薩や守護神その他に西欧のヒューマニズムが濃厚であったことである。人間ばなれした仏陀・菩薩ではなく、もっと身近に仰ぎ見る対象としての仏像である。つまり制作者にとっても、現に親しく接し拝むことのできる理想的偉人の像である。

研究者によると、釈尊入滅後、およそ 500年間は仏陀の像というものは作られなかった。それが初めて現れたのがガンダーラ地方である。かつてアレクサンドロス大王の東征はインド北西部にまで及び、以後 300年間に、ギリシャ・ローマ文化がこの地方に大量に流れこんで東西文化交流が起った。タキシラの遺跡が学術的に発掘されたときには、仏塔や僧院跡が発見され、丘の上にギリシャ風の神殿があったことも判っている。こうしてヘレニズムは釈尊が説いた教えと融合し、初めは姿なく「法輪」として観念的に崇められていた釈尊が、肖像彫刻として表されるに至った。最初期の仏像は、弟子の中に混じって、光背を頂く同じ背丈の人物の浮き彫りとして現れているが、多くの仏伝図が制作されるうち、やがて王族の一人釈尊は偉人化され、それを彷彿とさせる一体の仏像が作られるようになったらしい。

私はあらためて思った。仏教は紀元６世紀半ば、中国、朝鮮半島を経て日本に伝わった外来の宗教である。そして今日まで日本人のなかに定着し、奈良や京都に見るさまざまな仏像や仏画を生んだ。しかしその仏像の発祥の地がいまのパキスタン東北部、かつてのシルクロードに沿う東西文化交流の坩堝（るつぼ）ともいうべきガンダーラ地方であったことに、何と

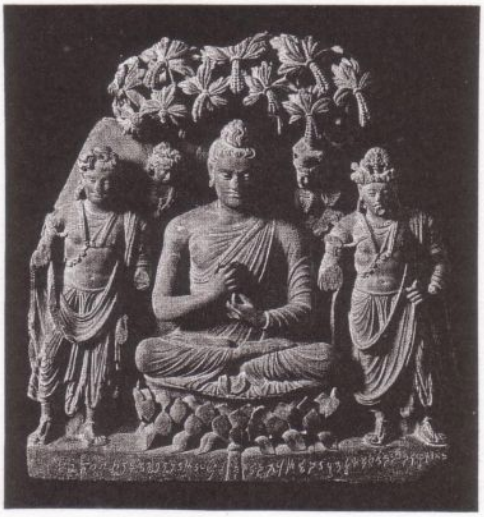
も言えない感慨を覚えるのである。しかもこの美術展で見たとおり、仏像は生き生きとしていて、とうてい大昔のものとは思われない。異文化の接触と融合、それは互いに相性がよく、根幹がしっかりしていて、その本質を失うことがなければ、優れた融合文化を生み出す。その見事な実例の一つに、私は感嘆せざるをえなかったのである。

【謝辞】以下に掲げる写真は本展図録より転載させて頂いたものであり、それを許可された関係者の方々に深甚の謝意を表します。



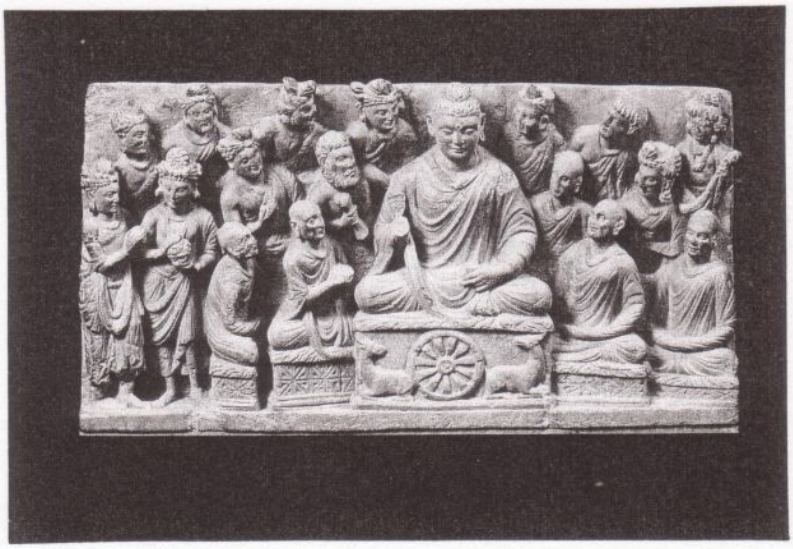
1（阿含宗所蔵）

2（平山郁夫シルクロード美術館所蔵）

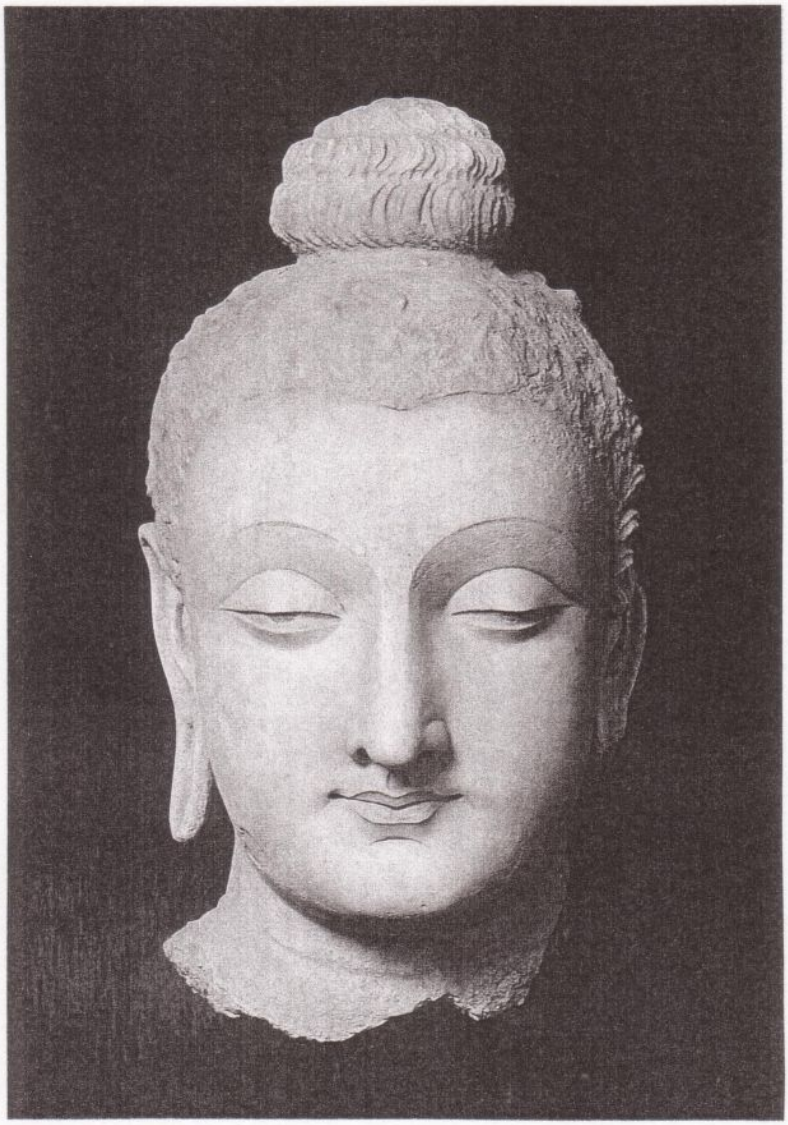


3 （阿含宗所蔵）

4 （個人所蔵）

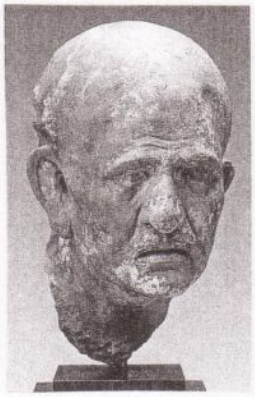


5 （真如苑所蔵）



6 （個人所蔵）

7（平山郁夫シルクロード美術館所蔵）



8

9

（流出文化財保護日本委員会所蔵）